

EurekaXIII

六年制通信 No.22 令和7年10月10日(金)号

デジタル教科書

五年後でしたか。紙の教科書のみ、デジタル教科書のみ、両方を併用する、この三つから一つを選んで授業が行われる、と。児童生徒ということですから、小学校の授業でもデジタル教科書が使われるかもしれないのですね。選ぶのは各教育委員会とのこと。文部科学省から「これを使いなさい」とは言わないわけですね、いつものように現場の判断でどうぞというわけです。デジタル教科書はフィンランドをはじめとする北欧諸国が先鞭をつけたと記憶しています。どういうわけかフィンランドは教育先進国ということになっていますね、日本では。私にはよくわかりませんが、昨今デジタル教科書に舵を切った国々が紙の教科書に戻ってきているようです。このあたり、フィンランド大好きな教育評論家の方々はどう評価しているのでしょうか。

これまたいつもの光景ですが、こういうデジタル教科書のような科学技術の発展に伴って出来上がったツールは「進んでいる」、「現代にマッチしている」、したがって疑うことなく「善」なるものであって、旧来の紙の教科書がよいと考える人は「遅れている」、「時代遅れ」、したがって当然「悪」であるかのような風潮が出来上がるわけですね。私たちは何度もこういう風潮を繰り返してきました。私はもちろん紙の教科書が学習に適していると考えています。時代遅れ、なわけですね。

日付けは忘れましたが毎日新聞は、文科省に取材をしてデジタル教科書のメリット・デメリットを次のように整理しています。メリット：①動画や音声を収録できる、②主体的・対話的で深い学びにつながる、③発達特性や障害に応じて工夫して使える、④繰り返し試し書きができる。デメリット：①視力に影響が出かねない、②集中力が途切れかねない、③操作に慣れる必要がある、④インターネット環境の整備が不可欠。以上、皆さんどう思いますか。デメリットの①と②だけでも十分な欠陥だと私は思います。この二つの欠陥だけでも、普通の大人なら小学生に使わせてはいけないと思うのではないのでしょうか。上に挙げた中で私が最もおかしいと思うのは、メリットの②です。これは典型的な言葉に酔っている文言だと思います。主体的で対話的とは、誰が聞いても反対のしようのない立派な言葉です。しかしデジタル教科書を用いた「主体的で」「対話的で」「深い学び」というのは実証されていないと思います。紙の教科書では「主体的で」「対話的で」「深い学び」ができないと言っているようでもあります。私は小中学校で行われるべき教育は、大学に入って、あるいは社会人になって「主体的で」「対話的で」「深い学び」ができるような素地を作ることだと思っています。基礎的な知識を十分につけて、考える材料を豊富に与えることが最も大切だと考えます。これがない

うちに深い学びなどありえないのです。ですから「主体的・対話的で深い学びにつながる」といった謳い文句が私は嫌いです。

デジタルという言葉は反射的にアナログという言葉を想起させます。時計を考えてみるとデジタルは数字の表記ですから、現在 1 時 17 分として 2 時まであとどのくらいを知るには計算をして 43 分という数字を導き出す必要があります。しかしアナログ時計は量でとらえることができます。2 時までおよそこれくらいの「量」が残っていると一瞬でわかります。この感覚、教科書にも言えると思います。紙の教科書にしかない特徴として「厚み」があります。自分がどこまで進んでいて、どのあたりに何が書いてあって、そういうことを感覚的にわかります。こういう感覚は記憶と密接に関係しています。少し難しいかもしれませんが、私は何となくデジタル教科書はパスカルの言う「幾何学的な精神」に、紙の教科書が「繊細な精神」に対応しているような気がします。もちろん私たちは「繊細な精神」を忘れてはいけません。

もう一つメリットの④が気に入らない。これは紙でも同じですが、教科書には何も書き込まないことを私は徹底して教えられましたからね。全てはノートに書くこと。

最後に、デジタル教科書はテストの結果を画面から消すことができますね。電源をオフにすればいいのですから。これが一番よくない。君たちにはいつも言っていると思いますが、勉強するには「知的正直」さが必要なのです。成績を上げようと思ったら「他者評価」から目を背けてはいけません。私が感想文でも何でも「応募する」ことを奨励しているのも他者評価を受けることができるからです。君たちの定期テストも同じことです。あれは貴重な経験なのです。結果に向き合いなさい。

今週のおすすめ

・大山誠一郎 『赤い博物館』 (文春文庫)

この作者の連作短編集『アリバイ崩し承ります』は浜辺美波さんの主演でドラマになりましたね。面白く観ていました。今回は警視庁で事件の証拠品を管理する部門、レンガ造りのために赤い博物館と呼ばれる警視庁附属犯罪資料館に勤務する館長の緋色冴子と、捜査の腕は一流で花形の捜査一課に勤務していたが、とあるへまをしてここに左遷された寺田聡が主人公。これ続編『赤い博物館・記憶の中の誘拐』も出ています。二冊とも面白かったよ。緋色さんはキャリア官僚で階級は警視。スレンダーで白衣を着ているがそれ以上に白い肌と肩まで伸びた艶のある黒髪、年齢不詳の人形のような整った顔立ち。初めて館長に会った時の寺田の感想は「雪女」。この人、クールビューティで異常な推理力を持っではいるが、明らかなコミュニケーション能力の欠如が見られる。このあたり、キャラだてが面白い。

ほとんどが時効を迎えた事件の証拠品を管理しているのだが、整理している途中で気になると再調査を命じる。館長が寺田に、です。たとえ真犯人を見つけても逮捕に至らないわけですが、それでも真相を暴こうとするのです。その推理が面白く、伏線もよくできています。私は知らなかったのですがドラマになったようですね。

BGM は 森川由加里 の *Show Me* でした…。